



野槌

上三四





門 1 曾 4  
775  
228



あはれ事い月ふるふしうるぐさむねわかれあは  
人の月がかりわたりよの物いあじとひひ  
又ふり病こそあはれあまそあそひしそ  
おろろれおみあはれは何うあまれなうらん  
月夜いれ也風のこころ人ふんを流くあ終  
あふみらぐけて流く流る水は身をこころめ  
つぞめそいられ沈湘日夜東に流去愁人の為  
よとぞかこころあはれもさずやいつらわるとんたり  
しこそわかれありしう愁康も山澤ふあそび  
て鳥をいれはわたのあふくつとく人と流く  
水あきよたはりしうあひあうさうるた  
うりんねさむしとああ





沅湘日夜 三休詩戴叔倫詩沅湘日夜東流  
去不為然人住少時注云身不得去故然水之  
去所以深傷已之不壯去也蓋叔倫事曹王於  
湘湘故有是作秦少游謫郴別有詞云郴江  
幸遶郴山為誰流下涕湘水正用此意

沅湘 沅水湘水皆水名

嵇康也山澤小好也 又選四十三嵇康

與山濤純文書云游山澤觀魚鳥心甚樂之  
一行作吏此事便廢安能捨其所樂而從其  
所懼哉 嵇康字叔夜竹林七賢の其一人也  
晉書よ傳あり  
人をもく水草きよ

玄賓宿都れあよ

とて四のあまきうととてげさむは内すまぬはれ  
は後月病風あどあうのあまきうととておせり  
李白が廬山の瀑布とて東坡の赤壁よあまひ  
句氣ありあうも末よあはくもとて山林よ  
たぶとんはあまきうとて水なり

何事もあまきうとて世のこぞあまきうとて  
とてあまきうとてあまきうとてあまきうとて  
たぐみのほくもあまきうとてあまきうとて  
代の姿うそあまきうとてあまきうとてあまきうとて  
及たあまきうとてあまきうとてあまきうとて  
ありもてあまきうとてあまきうとてあまきうとて















小板コイタ 名目ミナメ 神カミ 仙セン 中ナカ と云々ト云々 あり

方カタ を戸ド 今イマ の清涼殿セイリョウテン 此ココ 神カミ の廊下ナリカ たるにあり

疎ス 小夜コヨ たるまうけせよ 殿テン の灯トウ たる紙目カミメ たる

り也ナリ 又マタ まうせよマウセ 火ヒ と云々ト云々 あり

かカ いイ りリ 火ヒ と云々ト云々 あり

と云々ト云々 あり

よりヨリ てテ あり

禁秘抄キンヒシウ 云クニ 夜御殿ヨミド 四方シヨウ 有妻戸ツメド 南大妻戸ミナミオホツメド 一間也イツカンナリ

帳チヤウ 曰イハレ 清涼殿セイリョウテン 東枕トウシヤク 墨御座敷也スミミヤゼキナリ 御枕ミシヤク 有アリ 二階ニカイ 奉

安御ヤスミ 劍ケン 神カミ 室ムロ 皆有アリ 覆フキ 蕙ヱ 芳ホウ 也ナリ 御劍ミケン 東南帳トウナンチヤウ 四角

有アリ 燈トウ 檼シロ 又マタ 帳チヤウ 南西ミナミニシ 敷シキ 置ヅク 為ナリ 女房メヤウ 座ザ

河海カウカイ 云クニ 夜御殿ヨミド の心帳ココチヤウ の心角ココカク 灯トウ 檼シロ あり

燈トウ 檼シロ あり

あり

上ウヘ 卿キョウ 乃ナリ 侍シ 也ナリ 上ウヘ 乃ナリ 侍シ 也ナリ

心ココロ 乃ナリ 侍シ 也ナリ

内ウチ 辨ハシ 也ナリ

祓ハラヘ 司シ 乃ナリ 侍シ 也ナリ

人ヒト 乃ナリ 侍シ 也ナリ



徳大寺 九代 徳大寺 公實

閑院春宮大夫

公實

権大納言

實行

六条太政大臣

三条流号轉法輪

通季

大納言

西園寺流

實能

徳大寺九大臣

徳大寺流

公能

大炊御門大臣

實定

後徳大寺九大臣

公継

野宮九大臣

實基

徳大寺太政大臣

公孝

後徳大寺太政大臣

けん禁裏に候は末乃末も目おな〜と云慈好  
 初仕官〜にありてよ〜兄弟〜お也色都  
 人の來て長あ城とて是ぞ天子あり〜まを  
 而也とありふ出度はあ〜と〜いかにぞ

百官の旨をいゆる〜と廣く王建が常詞をたぐ  
 たりもよ〜ぞ知ての事也入よ〜と〜と〜と  
 〜〜まにあ〜り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 〜〜痛〜思〜た〜ハ杜牧が何房と賦  
 あり〜め〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 〜〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

輔王乃即お〜たり〜ます〜と〜と〜と〜と〜と  
 向〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 てた〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 社〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と







備り給ふと云々終る程ありひきとじつとト定之云  
てて耐院へ入給ふんとて此後を明年野あへ  
入給ふんとて終あり又明年伊勢へとて入り給  
ふんとて終あり二年此八月より翌年八月  
まで終ありと云々耐院言給流の事延  
喜式も祥也む鳥云伊勢耐院の終あり八媛  
娥のありと云々河より賀茂此流の野あり  
系野あり

續日本紀世二云宝龜三年十一月以酒人内親王為伊  
勢耐院居春日耐宮 三代實録才三貞觀元年十  
二月廿五日丙午伊勢耐院子内親王於鴨水邊六  
條坊門末修禊賀茂耐儀子内親王於同水邊待

賢門末修禊並入初耐院  
曰才四云貞觀二年八月二十五日伊勢耐院  
子内親王臨鴨水大修禊事良日入野宮  
延喜式才五 耐宮 凡天皇即位有定伊勢本  
神宮耐王弟内親王末嫁者卜定若名内親王  
者依世次簡諸王女卜之

やけくたりと云々此 源氏順本をよ  
野あけまるとありと詞云物と云々をさる小  
あけをたけと云々はそいふやとあけりあり  
いかりそめやと云々本あけと云々はそいふ  
かきと云々みまといふと云々はそいふ







此河とに鎮坐し流るる河と清瀬河とあり  
大和郡の常とありひりぬる河とあり  
今此内宮をりり  
雄略天皇廿二年此記宮より丹波の宮より  
豊受を神としりて伊勢の度會郡山田乃原  
勅語を今此外宮とし也是を妻を神ハ國常之尊也  
此河とに鎮坐し流るる河と清瀬河とあり

日本紀并神皇正統記より  
賀茂 雷神也下賀茂ハ御祖神也紀宮也  
上賀茂ハ別雷神也青賀茂健甬身余れい  
玉依姫河色に遊み河丹津夫流未流取て  
家の擔めを一人の男と有り其父と有り

とあり小盃を男ありて汝又と喚ぶ  
云付加の夫れ前り置け夫とす鴨の羽を  
そ姓と賀茂氏と有り也は付男子我ハ  
此子ありと云て飛て去る乃有り雷神也  
今の上賀茂なり玉依姫も同付と云よ  
槻樹のトに在りて神と有り是今のト鴨也  
丹塗夫も又神と有り今此松尾大の神也  
乃此家と云大貴の变化ありと也  
又古事記云大國主神娶坐曾形奥津宮神多紀理  
毘賣命生子河遲鉏高日子根神此河遲鉏高日子  
神者今謂迦毛大御神者也迦毛者賀茂也  
又日本紀ハ雷神大御神新遇突智此不変也とあり























又古今序よりわたり川のせまをりうらみもあはれ

けうつり 春序なきもひけうつり事なきのこ

くねひゆさかやもはうさけりあふとや

陳鴻長恨歌傳時移事去樂尽悲來

野鳥也萬葉に草のまどろくもけりま

野等ともまろく 里まのれて人のありしはな

まや庭に雛は秋のねくうり

桃李ののいふは 史記李廣傳賛桃李不言

下自成蹊 菅三呂詩桃李不言春統碧烟霞

吾跡昔誰柳

京極殿 拾芥中末云京極殿土門南京極の

南北二町其南一町被入道長家或大入道殿

家上東門沅是也 後一條後朱雀後冷泉三

代帝於此所誕生匡衡宅 皇后四人於此所

誕生於家紀伊嶋 賀茂明神通給後一

條後冷泉被加南一町

法成寺 一條河原あり後一條院あり

白賴公をみゆさくたきとけいせき也

志よりゆり事変り 昔は人のたの世とて思

てく志いさゆり事極いさつりありあり

唐園多くをくも 道長公は病中小法あり

唐園のゆく事附せしはるるの業はゆりま

我思うるの 我は勇傑也

我思うるの 我は勇傑也







或抄云延久三年正月十八日大極殿額可狹護人  
書平公卿會談之時兼行朝臣應撰已書大内殿  
舎額今度尤可書之由右大臣師房公被計申之

かどうりたああふふなま 法成寺などのもく名を

下之如汝況やまおれ旧治いりく船人なれ也

此は叙力たああり時よ子葉孫枝の程あげうせきと

以常て思ふも祓ねくうつりうり事回慕れ

石と拾ふううう 浴湯が旧宅に古槐冷志う

金谷園乃たハ風ぬありうう 朕と作う

二世二世より二世よりううう 一柱の

大之月の紅をうううすやまれば驪山とらゆりの

漢文陵と碑ありうううあれハ君も長も驕と

窮りぞしと共法を法をううう也道長公佛法と

あつてほまその福といりて寺とまうれう

寺とまうくうううなればま福とひねまうあや

風も吹あつたううう人の心はねあおれり年

月とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ね物うね世のわう成ゆくなひひ世をうう人

のつらきううううううううううううううううう

白さううのうううううううううううううううう

うううん事うううううううううううううううう

頃の百そはあの中よ青ううううううううううう

カキナ



よかりはのれまゝのころスミレ董のうゝとさびを文字  
あつさうゆき一ゆりらん

うぢも明あつぞうつふ人の心なれよ 古き  
賢ツラユキをうけ 桐花をくさぬもねほも人な

う風も吹あつぬ 山所秋をみそつらあ  
りのいせ中ね人なみの花ようありあ

わが世の介よ成ゆく 世よ乃心のあつゆり  
らりるりりまゝいさね人の別よりもあ

えぬくさり  
白き糸乃をゆん事とくれこ 高カウシ辨上人

あつさ糸と人れんよきとくさ事とあぬ  
ひりしれんらんとあつさいさあうむさハをゆ

ねま小そくめん 風雅集

淮南子曰揚子見達路而哭之為其可以南チ可以北チ  
墨子見練絲而泣之為其可以黃チ可以黑チ高誘注

曰ク惘ニ其本同而末異ト  
塘川院百首 多なは百首あり初なはるそを

於大納多敷尔公實勸進キンササキ之あふひく首を  
のゝゝハ則る実心の秋なり董の題なり

或説よはなはる首ハ永久四年の冬なりとあ  
樹頭樹底に殘紅片々東西零乱上下其子未結

薄倖哉ハシ立更風無頼哉封家姨ナセカチ不亦錯恨アヤシ乎花ハナ毫  
比色衰也風狂カウ比入心也ヒ冥恨我衰何恨ミヤ念ネン忽

変哉ヘン右行巫峽元ミト在入心ニ豈他求乎ニ玄都千樹







あふひらひひれ天桐賦は吹かりて逃  
たぬ先より系籠釵も中は長き十握あり  
十握釵も中は長き十握あり  
何藪雲たのひひれ天のひくもは剣とも  
中すは代は中資物あり

爾ま神皇あり天照大神天は石窟あり  
ひひれ法津のりりて天の香久山の坂樹  
の上枝小くけり八坂瓊之御統也又八坂  
瓊曲玉より天照大神素盞鳥よりひひ  
ひひれ中資物ありひひれ中資物あり又ハ  
素盞鳥尊は玉を羽明玉と云神よりうきを  
は天照大神よりひひれ中資物也

内侍不 貫不も神後事也八咫鏡も真  
経津鏡もも也是も天照大神岩戸小籠り  
ひひれ天の香久山の坂樹中枝よりけり  
ひひれ法津のりりて天の香久山の坂樹  
中枝よりけり天の香久山の坂樹中枝より  
けり天の香久山の坂樹中枝よりけり  
内侍不も貫不も神後事也  
天照大神賜皇孫天津彦火瓊瓊杵尊  
八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物あり又  
大神の勅一殿を月して安玉すべしあり  
よるそ上は八咫鏡より



別殿よまみおひ新よ改修して沖代もたはる大姫  
も授けしして伊勢もつらき給ゆも也 贖所の事  
あく禁秘鈔にあり

新疏

ありおきせおひ 此位を初りお給ふあり  
そのりとのともおきおはこ 主殿寮乃下月と也 禁  
中の掃除をよりあり  
ゆも乃ちやほこ ともハ伴氏のもの白殿寮乃ト  
部とかり也みやつこハ法奴の字あり  
は後讓國の阿内侍不叙おわらるるは 阿  
成王の崩しお阿赤乃大削弘壁戈ら  
頼とほり給く 康王乃位ハ弟ハ事とらやも

ゆり末殿よこのめりおれういゆり人もおれおん  
どしおれとまれの廣乃玄宗の心とらは 赤宗ハ  
位を讓て蜀よりと還りては南内小すも給ひ  
おもりげありされハ樂天も西宮南苑多秋草  
宮葉満階紅不掃とのひしゆして李輔國  
政とゆりして二帝と弁毫とせしとや

涼間乃年むより衣をり事ありし 倚座を法海の  
さゆをど板敷とませありのの蓋とらちて布乃  
もらうありしと沖調度とぬと病をかみ諸人  
のゆりぞく去乃年結まてとやうなるぞ捨し一氣



諒闇 書說命上曰王宅憂亮陰三祀 蔡氏傳云  
亮亦作諒陰古作闇按喪服四制高宗諒陰三年  
鄭氏註云諒古作梁楣謂之梁闇讀如鶉鷓之鷓  
闇謂廬也即倚庐之廬儀禮剪屏柱楣鄭氏謂柱  
楣所謂梁闇是也宅憂亮陰言宅憂於梁闇也先  
儒以亮陰為信默不言則於諒陰三年不言為語  
復而不可解矣

朱子語類問諒陰以他經考之皆以諒陰為信默惟  
鄭氏獨以為廬天子居廬廬合禮制朱子曰所  
引剪屏柱楣是兩事柱音知主及似是從手不從木  
也蓋始者戶北向用草為屏不剪其餘至是改而西  
向乃剪其餘草始者無柱与楣答著於地至是乃施  
短柱及楣以柱其楣架起其簷令稍高而下可作户  
也梁闇未詳在定制如何不敢輒為之說祖假使不  
如鄭說亦未見天子不可居廬之法 又問諒陰之  
義朱子曰孔氏曰諒信也陰默也刑氏釋之曰信謂  
信任冢宰胡氏秋之曰信然默而不言也二家皆用  
孔訓而為說不同鄭氏於礼記又讀作諒闇言居  
倚庐大抵在者天子居喪之名

梁闇之義少者謂之倚庐  
其朱子之說也







まぎにけいりる 枕葉子にさしつゝいふ  
しき物われらあひむいふあそびのいふ  
又折れり衣をりし人の文はさしつゝなる  
日けりけいりる

人志づまりてのち 人けしむるまらりる也  
後漢書列傳五末歛書云臣夜人定後とあり

其さしむもさしむの御也ささむむの御也  
貝足ツツ よろののたるとあり

かき人の手ありい 涼氏ヒヤノ 幻をまたらるる  
りてかきるる人かかふ物のはわでよ  
流しつぎそやせぬんともふかしの流の  
流しつぎそやせぬんともふかしの流の

ちりいよよゆい今ささうあつらうささ  
にゆいさあれが久しうぬまひりこしこ  
おるそいささうゆいささうゆいささ  
あささのさみりけりけり成ぬ  
ささささささささささささささ  
こいりりねんまやせぬいさささ  
事さささささ人のあささささ  
まして 物モノ 拾シ 江エ 舟フネ 舟フネ 舟フネ  
れ文をさうあをりてあつらうささ  
るるささささささささささささ

又選五十六清安ハシマシ 仁が書り 楊仲武ヤウチュウブ 誅ハル 云 披ヒ 秩シ







いづるくう分て字たさふるばり此末くハ衣  
まじやあひふさあはさふわさしたんぬま  
らねの今と名をたにまらば年々此まのまれ  
うぞんあらん人ありれらるるべきとてハ  
嵐よむじびり松もあをなまもそぢよらえ  
古墳いあられて田と成ぬそのさくたよねく成ぬ  
るぞかお

中陰 人死して未来生は中間より先ハ陰  
此よりりて得りぬる中陰と名づく五陰ハ  
色受想行識をかり或ハ一七日乃至七二日  
此る仏事と修むる也随願淨土經并無常  
經あらん

大藏一覽第一尊者設

摩達多曰中有極多住七々四十九日定結生故  
尊者世友曰中有極多住經七日不久往故問曰  
若七日内生縁和合彼可結生若爾所時生縁未  
合彼豈斷壞答曰彼不斷壞謂彼中有乃至生縁  
味和合位数死教生無斷壞故云  
んあハきき 深氏ハ君ハ必念誦を修して  
おろめらうまにやんあハたじ河海ハんそ  
ぐらうき成也 周章 擾  
ものあまはぬ 物ハ多らんもあはと云也  
はそ乃日 甲十九日あり  
約あられぬ 分静くちあうらと後り愛めん  
ハ別くはなりて 退教より義あり



又わろとありとひひとありけりし時を  
わらわと互にりりありとわらわとあり  
ありとありの事 日本紀小云とありと  
清く河海よりありとありとあり  
史記汲黯傳上曰吾欲云とありとあり  
ありとありの事とありとありとあり  
ありとありの事 下学集曰穴賢上在時倭漢兩國  
未ち家人辰土窠恙虫螫入故本朝書札未相  
勸云穴賢言土窠と穴賢閉塞可防恙虫

去恙と云字ハ戦國策よるもあり何年も  
ありとありの事とありとありとあり

と云ハ其去事なりとめとありとあり  
ありとありの事とありとありとあり  
祝珍重と云とありとありとあり  
と云義我もありとあり

年月へとも 深氏玉鬘小年月へとも  
れどありとありとありとありとあり  
ありとありの事とありとありとあり

文選北九古詩云去者日已疎來者日已親出郭門  
直視但見丘与墳古墓碑為田松柏摧為薪白楊  
多悲風兼悲殺人思還故里周欲飯道無因註











いふ物ありんれ也よは紙とて去はひぬきこた紙と  
ふゆの優チくはるるこめのはくたよりちりし一見  
井ツマころよ書きたとをすこしとてあましくなる  
しりまもやぶとてしむるもあつてもくらたし  
しゆしゆとてみる人あつてもつらさうあつて  
ふしゆまはさくく約りたつらげひよまら  
その人あつてぬくうせまらりこみゆり

あまのこをせと 葉月ハツキちりり也

ねこはゆのゆりに 事振は優チふ也

枕草紙をばはらうとあつて物いふれんごせあつ  
人の九月づりにいふとあつてめつらうしうしうみ  
りておしりちまふもあつてつらさういふと

はくしていづのまはしりぬくもあつてあつてあつて  
わづえまといふはえんをりいづらうとあつてあつて  
とらゆりしとてあつてあつてあつてあつてあつて  
いきぬくぬはしりしとていづらうしうしうしうし  
あまのね月のあつてあつてあつてあつてあつて  
りしとてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
はらりきりりしてあつてあつてあつてあつてあつて  
月の光のよをうたへもあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて











あつていふまじい事なれども御座りし人ぞいれと  
 人のいふ事なまぢい事也  
 ちがひごと  
 仕下やりのひより 仕下りてははるまじい事  
 うつろひりし事こと人一人やまじい事といひ  
 ねに坊にあり

笠櫃上之三者於砥用郷 自十月十九日至同廿一日写之

中村直道

物々へとてなぐるれり人のまあはけれよんを  
 さにほくろくする御座り申りし事とて又かゝり  
 れどいふ事なれども御座りし事とて又かゝり  
 人なまぢい事なれども御座りし事とて又かゝり  
 あつていふまじい事なれども御座りし事とて又かゝり

此は男女朋友はる御座り  
 交ひし事なれども御座りし事とて又かゝり  
 こと也礼のうらに御座りし事とて又かゝり  
 こと也礼樂のうらに御座りし事とて又かゝり  
 交ひし事なれども御座りし事とて又かゝり  
 うらに御座りし事とて又かゝり  
 あつていふまじい事なれども御座りし事とて又かゝり











藏金於山抵壁於谷注云抵側擊也

うづもれぬ名白氏文集遺文三十軸軸々金玉

聲龍門泉上土埋骨不埋名

おろろはくはる人又祖の瘞よりして不肖

此子孫も官位よのわはくあり者も官位あぶよ

賢才を用ふは世に家にありまると例とをを

世官とまよと政よりくは又愚をれと世よの

揚國忠が愚一と國柄と弄く

賢人聖人みづくや位よと

孟子萬章下篇為貪者辞尊居卑辞富居貧辞尊

居卑辞富居貧思乎宜乎抱関撃析孔子棠為委

吏矣為乘田矣

人のやをよろふ論語顔淵篇云夫聞也者色

取仁而行違居之不疑在邦必聞在家必聞

莊子逍遙遊云奉世而譽之而不加勸奉世而非之而

不加沮定乎内外之分辨乎榮辱之境

卷ハ又一の一なり韓退之送李原序

與其譽於前孰若無毀於其後與其樂於身孰若無

憂於其心

力レほの名通鑑魏主獻曰選舉勿取有名々々如

畫地作餅不可啖也晉書張翰曰使我有身後名

不如即時一盃酒

智ハ恵ハいハ偽ハあり老子云大道廢有仁義智慧

出有ハ大偽王介甫注云智者知也惠者察也以其有知



有察此大偽所以生也 息肩注云不幸而又有小智  
小慧者竊仁義而行之則偽自此滋乱自此始  
又老子曰絶聖弃智

煩惱 大智度論曰煩惱者能令心煩作惱故名煩惱又  
曰屬煩惱屬瞋屬痴是名煩惱 大藏一覽詳や

侍てば言ひてあるハ誠此智のあり

佛のよりいへば佛智は智小智世智便聰の類  
也 眞實の智ハ因鏡平等觀察成作是と佛心  
は四智といふと体と法界と云法界は用ハ四智也  
其体用を一心なり 在元の実智といへば愚なり  
よく思ひはよく中央之帝方渾沌と云是  
なり我儒より賢智といへば生知の智知は

智舜の大知これなり 賢智ハ眞實乃智のあり  
ず良知の智是非れ智は又眞實なりゆへ  
致知と大學はよくよくとせざるなり

不可ハ一條也 莊子齊物論云方可方不可方不  
可方可又云不可不可不可物固有所以然物固有  
所可無物不然無物不可故道通為一

是善惡是非不可不然曲直邪正一切世の物  
論と行はるの老のり

何なり善とありふハ天をれ善惡不二六祖善不思  
善不思思とあるに色と

まことの人の 眞人と云 道遠遊云至人無已神  
人無功聖人無名 梁武帝建寺度僧達磨曰無功德







悪人の名は残さるべきと傳へ具と残さる事いり  
え名くゆり又不肖るれ毎ち約のあめ生れ  
或は名くさふいといきま又智賢るれどもめ  
ありは貧賤な事といつらに後れ發策な  
れど下の約小佛光の見解を以て決する事  
口行一可不の一條として煩思得失のけり  
ひ小於くざるをのれは道とす是莊子う奇  
物論のやく金剛經の應無所住而生其心の  
義小を記す福ありまをいと水上の胡芦とふ  
我乃とあつとす不貪を室とするなりは氏利  
より而して利を吾仁と察とするゆは玩好の  
物とすつとも守一人の私よあつとて天下の

利あり今も克舜の心あり則克舜の名あり  
人の性善るれは人々皆賢然あるべし  
内あれば外あり實あまは名あり如何ぞ仁義  
を考て名をなさん賢人の可もあく不ありも  
形一は以佛光に引合をせざる其のまはさ  
而も不問あり可もれく不可も好えらるる義  
あり義のまを時を空くしてそのつらみあり  
小ありは名をさるるまはさるるがらにちをか  
ちりてりありもあつとてけりありありはとこ  
りて日用の事なり森羅万象のつら事  
也とみるゆに名利を考て生れよ名をばんて  
いみまがるるは行ふる意好







嘉應帝召入宮受戒藤相國兼實延問淨土  
之事空述選撰集呈之專修之徒取為秘要  
建永二年二月竄讚州建曆元年詔追赴都  
城二年正月居大谷染疾其徒安弥陀像於  
床頭且為願終助標空曰仏菩薩真身今又  
未也二十五日高唱佛号諸徒助和午時著  
傳持之慈覺僧伽梨頭北面西誦光明遍昭偈  
而寂年八十臘六十六元亨秋書才五

昔韋提希夫人於如來十六の親慈を用く  
是淨土念佛の始也其外修多般の教を以て  
凡そより龍樹天親は二菩薩といはれしは

中華にてハ東晋の法師庐山へ入て蓮社を  
結ぶ曇鸞高道緯を續して宗をひろむ天台大  
師も浄土十教論を作て世に好ぶ唐に世に  
及びて善導盛り唱ふは道俗男女共々  
かぶ事用はれり弟の彌陀此也  
とぞ人中尊の入り涼の沙門も善導の  
法も法人の著述多かれ天台十教善導の  
疏義もよみよみて急ぐゆり本物にハ空也  
上人初てよむるは佛印法生要集とあり  
て深く信ありあり安養の生所其は法然と  
人ありは法然の法を以て其の法然と  
くいはれしは他家を以て其の法とあり



他家より法然も往生要集を名く是り知りて  
浄土家より善導の書と讀てさうし  
又善導の書ありていよく他念を  
月輪相國の爲に作し撰集今の代に  
家の授受お侍りて其つ人多かり或は  
即便往生と云ふ衆生往生をば誦読も正受とこ  
ういふ大教ありて既に十劫以前成佛して  
一切衆生も悉皆弥陀回向し成佛を今日唱へ念  
佛は其佛恩を報ずるあり或は為得往生と云ふ  
未知れん夫多の罪をばしりて地獄に處へん  
つとび弥陀を信ぜれば衆罪皆消滅して極樂  
國にお往生あり也或は又今一念よなまけりて

かゝく信ずる何抄解して捨つるぬま何決定  
往生と思ひて是れは信んぬまづけまはれ一  
期のるり念佛の報謝ありと云ふ或は又臨終  
念佛をばはるるを佛菩薩の来迎にあつ  
るもいふかまはるる成ゆへ衆多あり又  
往來の西方よまはるる也西方の西方にありて又  
亦南の西方にありて西方を清浄國也念佛の  
清浄の也阿弥陀を清浄力也身心おと  
不二なる念の弥陀佛於東國におなり也亦命  
無量りののん梵語の阿弥陀といふをこそ成  
悟りを往生と名はるる一切の形ありのれ限あり  
心は虚空にこころなるよおん悟と云量壽



定もも也海もももの八十方億出さるる物の  
まは不遠也をくハ弱水の万里を隔るる蓮  
葉もも力あり蓮葉十二橋ありがくハ雲霧  
此丹後と統とて念佛を修ハ呂洞賓が袖  
裏の青蛇と抱て黄龍も来セハ身兼蓮葉  
を唯心淨出ようりなりハ統也ハ長生不死  
とこのも活きして寿命無常ありといふも  
もにまはしるるなりありはもあるべしこれ  
も念佛の弊を事ハ又よく知べき也いせ乃貧  
賤飢寒にらるるも若ハ早の死ハ一と極ありむ  
まらハ一と云てつらくくびくあり水火に入もあり  
又一くハ念佛あり力もて無常罪を消滅と  
まて練又ハありきこら成るる者もあり又男女  
戒すくめ入るる邦て法を犯さぬハ法犯乃身  
安樂が六條河原とて斬るがとくありもあり  
又思ひなり人々をさるるつらつらつと  
染してハ小念佛もれももれんハ難れ  
妄念のみ場ももりのハ浄土門の罪人なり  
つらつら蓮花の淤泥より出て泥にうはさる  
つらつらあハ安楽即寂光と蓮花園  
ともハくも也念佛ありもの多きもた  
亦ハつらつらあハ筆に戸く場と  
ふあつらつらあハつらつら







我々よふと云ふ事なく生れたるも  
今よりあつらん物をわらへて物とて目と  
ををあるるりてふたはまきりて物とていひ  
れは前なる人よ海とてしつたをいひれむと  
うもふとひてうねりてをえりてうへを治  
つてはとわりてよび入りてさうねりてうへ  
を思ひひてうねりてさうねりてうへを  
ぬる心とて胸にあつたりてや人本るあつ  
ハ河よりりて物と感ざる事なれりあつ

六月五日賀茂丸

元亨釈書廿八一演法師欲安觀音像廣求靈區  
負觀中到平安城東北鴨河西岸于時地搖震

紫雲降垂蓮花紛乱奇香薰郁演喜而拈伽藍  
以故号感應寺一日老翁持釣竿出河中詔演  
曰我此地之主也自今應為護伽藍神我有神  
力能除魔障去疫癘又結好夫婦調適產育  
所謂牛頭天王者也我好眠一歲三百六十日只  
五月九日醒餘日皆卧端午之朝初起向天吐氣其  
氣或為雲霞或為雨露觸分不同其所觸或為藥  
或為毒或為惡瘡或為疾疫皆是有情業感  
也非我強為也言已形隱演録神言奏朝勅黃  
門侍郎藤長良就其地七日夜行道念誦以報  
神德  
一演法師々大中臣氏治城人なり



くくくし戸 競馬と云なり

世にあらぬもの 深氏帝亦ふあらぬもの物に云ん

花鳥よるま物あはらぬものやどくつふがこと

萬葉才九詠浦島子歌小世間之愚人之吾妹

児尔 せりくるり義あり

左傳 晋悼公周子有兒無慧不辨菽麥故不可

立杜預曰菽大豆麥殊形易別故以為痴者

候不慧蓋世所謂白痴

人本心小あはれはも 遊仙窟云心非木石豈忘

深恩 白氏文集人非木石皆有情不如不遇頑

城也

伊勢物語くしりく物とありたり女をさうりく

りくく月日くさげくいとあはれありあはれを

ふらりくくやたのひたむ

唐橋中將くしふ人の子に行雅僧都とて教相

人の師より傍ありたり氣れらる病ありて年

やうくくくくるるわくく鼻の中あはかりて息も出

りくわたりたれは油くく小はくゆひたれどつりく

かりて目眉額あはれもくもくひてうらむひもれ

物もくくく二は葬の面のやうめくくくがたぐを

海く鬼のふにありて目いひてまきれるははは



類の如く鼻よりなりをいふは坊のうられ人  
よもつていふものなりて年久しくありては成  
づつて成て死すなりかゝる病も事平に  
ありきなり

唐橋 村と漁氏久我の庶流あり

唐橋 権大納言正二

大納言正二

侍従正五下

通賢

雅親

通親

参議中將正三

行雅 僧都

教相 真言宗の經論般若教を學ぶ教相とし

おこるひとまらむと事おらふ

氣れあがり 津氏若菜下に氣のつかりゆりや

うりたわひたれハ眉額おどろけて目れと

たゆふあり

二の舞のありて 伶人の舞の向也夫亦

ておそゆきき也安摩うそわき或舞あり

其次小舞を二れ舞と云ふ

鬼れくふにありて 曾燈新詔小載る焉

大異が鬼穴み入て鬼のさうふ成てふり

これハ里人ともたうきて近侍らざるこた

りひ合をゆる

此後奇異れ病のを事といひ安小ぢるよ

莊子 人間世 又離疏者願隱於背肩高於

頂會撮指天五管在上兩髀為脅註云會撮髻

也五管五臟之喻也



又太宗師篇小つる子興コ病カもかたし  
在シ子コの詞コトの寓ウケ言コトるれども又實コトる事コトも  
唐タウの悟ウケ達コト國コト師コトの人面シ瘡サウの病コトある  
事コト編ヒ年ネン通ツウ論ロ佛ブツ祖ソ統トウ紀キ勸クワン善ゼン書ショ等トウの  
又マ人ニあり時トキの人面シ瘡サウをシて酒シユ合カを瘡サウ  
乃ハ口コよりシりシりシじ貝イ母モをシて念ネンぬル面シ  
湯ツ難ナン姐シヤよクりシりシ又マ人ニの鼻ハナよりシ鉄テツ針シンのシ  
くシなりシ類ルイけケくシりシ事コト或ハ腹フツ中チュウに應オウ声シヤウ虫チュウ  
のシありシ事コトあリも搜ソウ神ジン秘ヒ覽ランよクのシりシ又マ谷コク  
醫イ類ルイ茶チャのシ種シュウの奇キ疾シツをシるコトありシ又マ河カ内ネの  
行キョウ雅ヤ僧ソウ都トの病シヤメもシありシ又マ河カ内ネの  
矢ヤ田テン寺ジヤウの繪エ草ソウ紙シありシ給シの位イ者シヤク法ホフ眼ガンの筆フデ也ナリ  
と云ク傳ワカふコトありシれバあリさアあリぬ異イ病ビヤウとシり  
其コト草ソウ紙シ近キン世セ人ニおシりシて屏シヤウ風フウ涼リヤウのシりシ  
りシりシ又マ一イツ鷗ウ宗ソウ雨ウのシ一イツ醫イ作サク筑ツク常ジョウのシ  
りシりシりシのシありシはシて宿シュクをシ借カりシ婦フ人ニ出デ合カてシ又  
人ニの疾シヤメをシ思シきシりシんニと云ク入ニてシるコトもシ一人ニ身シ目メ  
口コ鼻ハナもシかくシて坐ザちリ者シヤクありシ乞キツ我ガが男オトコあり  
と云ク發ハツして出デてシるコトもシ又マ一イツ紋モン婦フ人ニいハりシりシ第  
世セの因果インガもシやカりシ人ニと契チヤクけケりシりシやカりシりシ  
飲イン食シキをシ興キョウもシばシりシりシて頂テイのシりシとシりシ頂テイ  
口コをシて物モノをシくシりシと云クかリりシあリやカりシ事コトもシあ  
りシと云クやカりシ人ニいハりシりシ



春のつれづれにわづらひに艶エシなりうらうらに  
 かゝぬ家持はくわくまをものありてをよ敷志  
 やもてらる花んさささるをありて入てくれむ  
 何のつれづれに皆ありてさびしうなるに  
 いさそ妻はよれたほどにあまうるひヒメを  
 あれよりささるはささるささる胃イれさ  
 びりりして打さけさるささるささるさ  
 由るそ札ツクのささるささるささるささるさ  
 ねんささるささるささるささるさ  
 えんささるさエシの字もやびりりさ風  
 艶湯エシは景シの旂あり  
 花んをささるささるさ

有花使ナハ合ナシつ主人莫ナシ同ナシ誰ナシ

白氏文集 遠エシん人家花使ナハ入ナシ不ナシ禱ナシ也ナシ賤ナシ

与ナシ秋ナシ跡ナシ

何やさ竹のあみえのうらうらにわづらひ  
 の月影いづあひささるささるささるさ  
 狩衣カサよさるささるささるささるさ  
 何やさあひささるささるささるさ  
 何そなと摘ヒキ葉ナシのあみえのうらうらに  
 苗コメをえなうらうらにわづらひ  
 づい人もあひささるささるささるさ  
 しくてささるささるささるささるさ







清く浄佛事なむさきふふやといふ山堂の  
くた法師ごもまのりたり釈室おらけふ  
そられりうううにわひと力なきむ  
あらしに寝ぬうり水影の廊よりふ女房れを  
ひ風よりいそと人めをれ山里もいづれん  
くひもさういふさきよあげと秋めうらむさ  
あまの露よりづりもそまの香わごころま  
雲水の香はよやと都のうらふあふ雲れは  
あもさやとくらうて月のりれもる事さ  
ごめが

は股と前股と一よまづげくらむあつら  
ゆへよ

榻 シテ 和名集榻 知カ 赤也車をまてたぐ物あり  
くうかをれやうなるもの也

女房のまの風よりいあごまうい用名とあ  
ないうをいたさ物の句也 示シ 源氏末巻よりありし  
うひはつらまの風よりいなるまを末のま  
人もおとらまのぬ

出れ書かごころま カゴト 加言とあり

徳氏 トクジ 幻をつれく我をれくまなれ目と  
くくう向くまひのまね  
又 チカ 相ふふ又くら月を又くらつきの夜まあ  
くそくま







拜ありきバ又方々拜とせりける後鑑湖又  
かたけて山野をめぐりては時の人方家士と  
号せり力まかりてのち以人玄英先せと号し  
けりかたけ事もせよありける事よしと  
皇朝類苑四十六江南邊鎬梁慟寡斬唯好叔氏  
初從軍平建州凡所克捷惟務全活建人德之号  
為邊羅漢及克湘潭鎬為統軍諸將欲縱掠獨鎬  
不允軍入其城巷不改市潭人益嘉之謂之邊菩  
薩及帥於潭政出多門絶無威断惟事僧佛楚人  
失望謂之邊和尚

柳ヤナギ此多カウ強盜カウ法中カウ号カウ其傍カウ多カウひ  
くカウ強盜カウ又カウあカウひカウくカウゆカウくカウあカウ乃カウ名カウ公カウつけカウまカウ  
るカウ

南朝強盜法師と號する傍あり忍人あり  
小師とて盜賊とてを執る人の家も忍び  
入る人もあらず又人より好む財物とり  
うり時人よりたてのれは盗ひ用ありん時  
うりてふ久くして賊徒とすあ忍を  
あつた者小懸うめんこおふあり是より  
て強盜法師といふ名を得たりとて沙  
集よりとるなり  
りれ名より五つたれ事春秋傳よりとる







尸ぞうしこいひりる部さむりりん  
清水

これひりり河 萬葉内さうさうりりたの  
まゆねけりるひもさうりりあかも

古今まてゆらん人さうめんさうさうたこ  
ありりるさうさうねもひりり

毛詩抑風終風篇寤言不寐願言則嚏 註曰我甚  
憂悼而不能寐汝思我心如是則嚏今俗人嚏  
云人道我杜古遺語也

瑣碎錄曰白噴嚏子日酒食卯日大吉辰日婚合于  
日喜事酉日客至戌日嫉思亥日君子思餘皆凶

漢書藝文志嚏耳鳴 雜白十六卷 師古曰嚏

李濟翁資暇集今人每嚏必自祝音了計反所祈多案

郡終風篇注願於思也言於我也蓋他人思我  
我則嚏之也鄭又稱古遺語每嚏云人道我以

為他人說我々則嚏杜正得其願言者非祝願  
之願非語言之言今則自祝乃由誤解詩句爾

容齋隨筆卷四云今人噴嚏不止者必嘆唾祝  
云有人說我婦人尤甚云嚏音帝鼻氣

由カ和福カ 日本紀卷一其禁厭  
之法



光親ミツチカハ院シヤウの最勝サイセウ海カウより一ヒトとありひるると仰  
おめきれて供湯グゲをのびきれて念ネンさうきさうきとて  
念ネンり〜〜〜の衝ツイ堂カサ子と山ミ麓スの中ナカへ入イて  
所トコロ出デよりより女メ房ボウあれたるを誰タレもとせこてぐれと  
中ナカあられれたるを誰タレもとせこてぐれと  
ありと〜〜〜感カンさうをたまひけるらう

光親ハ

東鑑トウカン廿五ニジュゴ兼久ケンキウ三年七月十日

按察フセチ卿キョウ

光親去月出家  
法名西親

者シヤ為ナリ武田タケダ五郎ゴロウ信光

〜願カネ下ゲ向ムカヒ而シテ鑓ヤシ倉クラ使シ相アイ逢アヒ于テ駿河スエノ國クニ東ヒガシ返マゼ  
邊ヘ依ヨ觸ツ可カ誅ス由ヨリ於テ加カ左サ坂サカ梟ウ首クビ訖ス時トキ年ネン四シ十ジュウ  
六ロク日ニチ此コノ死シ為ナリ無ム双スウ宦クワン臣シ又マタ家ケ門カド貫クワン首クビ宏オウ才サイ優ウ  
長ナガ也ヤ々々度タビ次ツギ第ダイ殊ス成ス競ケイ戰セン忠チウ頻ヒン有アル達タツ君キミ於テ

正マサ慮リョ之ノ如ニ諫ケン議ギ之ノ趣キ於テ背セ敵テク慮リョ之ノ間マ雜ソク進シン退タイ  
惟タラシ谷ヤ書シヤ下ゲ追ツイ討トウ宣ケン旨シ忠チウ臣シ法ホウ諫ケン而シテ隨ツイ之ノ謂イハレ歎カク之ノ  
諷フウ諫ケン申マシ狀シヤウ教ケウ十ジュウ通ツウ殘ザン苗メウ山サン河カ後コト日ニチ披ヒ露ロ之ノ時トキ  
武ブ別ベツ後コト梅バイ惱ノウ丹タン府フ之ノ時トキ

又マタ源ゲン光クワウ行コウ海カイ道ドウ記キにモ光クワウ親シンのノ事コトあり  
はハいハらハさハひハ 衝ツイ堂カサ子もモ筑ツク意イもモちチりリまマりリとトおオの  
やヤうウなナりリおオなナりリ  
知チんン〜〜〜  
此コノ段ダンのノ心シン最サイ勝セウ海カイにニ奉ホウ行コウ〜〜〜威イ儀イをヲはハく  
うウふフいイ〜〜〜物モノ々々ひヒ〜〜〜しシきキりリはハいハ〜〜〜  
そのソノまマ〜〜〜とトくク〜〜〜のノいイらラがガりリまマ時トキ〜〜〜かく







老ありてはげめて老と

朱文公勸学文勿謂今日不学而有来日勿謂今年不学而有来年日月逝矣歲不我延嗚呼や矣是推之也

ありき墳

李卓吾浄土決云古人句云莫待老来方学道孤墳盡是少年人

待老来始学道在墳多是少年人

まごわりのものやまごわりの

莊子蘧伯玉行年六十而知五十九年之非

淵明歸去來禱覺今是而昨非

はるまもも 新古今交遊りてくはるまもの

かのまもも忘れさう思ふいもらんと

ハ雲抄小法師はまももハ草かりてつらぬりか

ご云つり時のる也 小鹿の角の来たるハ鹿の角

角と生ざり時一まづり又後とらふ夜月と角と

生ざりぬるま即ゆくまもも

禅林此十因 福林と寺あり也 東山永観も有り

ま永観律師の作も有り 往生十因一卷あり一廣

大善根故二衆罪消滅故三宿縁深厚故四光明

接取故五聖衆護持故六極樂他生故七三業相

麁故八三昧發得故九法身日休故十随順奉獻

故



心戒 或云心海欵

新撰撰九 心海上人一念不生をよめる茶を  
むきつぬさだの白糸の何とならとてまけ  
めらん 目十八心海上人命をふける人お  
わすむらんうきまふいぢりこもつうたれ

鹿長乃法伊現園より女の鬼ヲニを成る事とてこの  
ゆりしるしとてし事ありてまはせり日ごと  
り 京白川の八鬼をよそし出戸より昨日ハ西園  
寺ままゆりしるし 今日ハ遠くあるごとくたぐとハ  
うこうしよあぢいといありてりしるしとてりしるし

人もあくそうあくそ人もあくそと下たて鬼の事  
つしんいやまそそその法赤山ちと安住ヤスヂ流きく人  
ゆりし四條よりうきあす人活物とてりしる  
一深室町は鬼ありてはくありあり今出川の  
色よりるやとて一院の津ツ棧ツあはれありとてまよひあり  
うきもあつとてまよひありとてりしるしとてりしるし  
つしんあつとて人とやりてりしるしとてりしるし  
ゆものるし一書りまてかてりしるしとてりしるし  
浄じやうおたりて浅あさしとてりしるしとてりしるし  
かきまて二三日人つわづとてりしるしとてりしるし  
鬼れろとてりしるしとてりしるしとてりしるし  
人もつし











鄂槌上卷四者於益城下原町邑自  
文政十一丁亥冬十一月二十日起筆同  
二十二日夕津一河之思  
中村直衛



